

バローチスタン初期農耕文化と交易 —副葬品からみた交易と社会の階層化—

宗臺秀明

Culture and Trade in Neolithic Balochistan :
Trade and Social Stratification as seen from Grave Goods

Hideaki SHUDAI

新石器文化段階における域外交換が、南アジアの社会におよぼした影響をメヘルガル遺跡に発見される埋葬人骨に伴う装身具から考えてみた。装身具には、バローチスタン丘陵に産出する紅玉髓と凍石の他に、文化的な域外に産出するパミール高原のラピス・ラズリが多用されていた。前7000年から前5000年の間に域外交易によってもたらされたラピス・ラズリ製装身具を纏う人骨が、次第に男性に収斂されていく反面、家族間に装身具の質的差違がない様子を確認した。その結果、ラピス・ラズリ交易ルートの一端に位置するメヘルガル遺跡の新石器文化社会において域外交易が、階層化に大きな影響を与えていなかったと結論づけた。

キーワード：南アジア、新石器文化、副葬品、交易、社会階層化

Grave goods from Neolithic Mehrgarh in Balochistan included many beads of Lapis-Lazuli that had been extracted from mines in Badakhshan, Pamir. Lapis-Lazuli was distributed over Ancient Western Asia in the 'Ubaid Period, from the early 4th millennium B.C. onward. A examination of Lapis-Lazuli as grave goods at Neolithic Mehrgarh, 7000-5000B.C., demonstrates that, during the pre-ceramic Neolithic period, Lapis-Lazuli beads were buried with children and adults. During the ceramic Neolithic period, beads tend to concentrate with adult male, but not with family groups. The exchange of Lapis-Lazuli in the Neolithic did not cause Mehrgarh society to stratify into classes.

Key-words : South Asia, Neolithic, grave goods, trade, stratified society

はじめに

インダス文明がおよんだ地域とその年代に属する墓は、これまでに数多く発見されている。なかにはモエンジョ・ダロー (Moenjo-daro) の都市が放棄された際の争いの犠牲者と誤解された遺骸もある。しかしながら、都市を統治したとおぼしき「王墓」など、社会階層を明示する墓はこれまで発見されていない。そのことがかえって、インダス文明の社会的特徴であるとの指摘もある (Wheeler 1968)。インダス文明都市遺跡の中には、周壁外に発見される耕地跡が周壁内住民による農耕を示しているとされるカーリーパンガン (Kalibangan) 遺跡の他、専業工人による活発な工芸活動が指摘されているモエンジョ・ダロー や ハラッパー (Harappa) 遺跡がある。「王権」の存在を明示する遺構のない一方、都市内での農耕民と専門工人による分業の進展からは、都市国家的様相を見いだせるかもしれないが、都市間係争の痕跡は確認されていない¹⁾。こうしたインダス文明において、工人による工芸品製作は、出土する分銅

に示される度量衡の統一を背景として行われたものと考えられ、ペルシャ湾岸地域を介して前3千年紀後半から前2千年紀初頭にかけてメソポタミアとの交易を活発に行っていたことが、メソポタミア出土の碑文などから想定されている (近藤2000: 103-104; Shaffer 1982)。域外交易を重要な経済的基盤としたインダス文明であったが、なかでもアルカリ腐食文様を施した紅玉髓ビーズは、インダス特産品として考えられている (Kenoyer 1997)。こうした交易ルートの掌握が、インダス文明の命脈を左右したであろうことはすでに指摘したところであり (宗臺 1999)、この交易が文明内の社会階層化の一因であった²⁾。

他方、文明以前の新石器文化から町邑段階の農耕文化社会にあって、社会的階層分化が全くなかったとは言えないであろう。アフガニスタンのバダクシャーン (Badakhshan) に産出するラピス・ラズリは、実際にインダス文明期の諸遺跡からよりも、文明に先立つバローチスタン (Balochistan) 農耕文化期の諸遺跡から、より多数が出土

しており、遠隔地交易・交換が早くから行われていたことを物語っている(宗墓 1998a)。以下では、ラピス・ラズリなどの貴石交易がバローチスターーン農耕文化社会におよぼした影響を副葬品から窺うこととする。

メヘルガル遺跡の墓葬と副葬品

南アジア地域での文明段階以前の遺跡は、ジャリールプル (Jalilpur)、サライ・コラー (Sarai Khola)、ハーカラー (Hakra) 遺跡などがインダス川支流域のパンジャーブ (Panjab) 地方の沖積地からその段丘上に発見されるが、新石器文化の後に断絶を置いて町邑段階の集落が営まれたり、または町邑段階から始まるもので、長期間にわたる集落が継続的に営まれる遺跡の多くは、インダス流域の西方に広がるバローチスターーン丘陵に位置する。こうした文明以前の諸遺跡において、新石器文化から文明形成期の埋葬骨もしくは墓や墓域の調査例は非常に少なく、唯一メヘルガル (Mehrgarh) 遺跡においてのみである。

メヘルガル遺跡は、バローチスターーン丘陵の東、ボーラン (Bolan) 川の作り出したボーラン峠を東へ下ったカッチー (Kacchi) 平野に位置する。現在も遊牧民が季節ごとに移動する河床には礫が堆積し、遺跡が立地する河川氾濫原は非常に狭い(図1)。1974年に始まった発掘調査成果によれば、紀元前7000年の¹⁴C測定値を示す

す遺跡最古期のIA期からは、栽培オオムギの穀物遺存体と家畜ウシ・ヒツジ・ヤギに加えて、磨製石器が出土する無土器新石器文化が確認されている³⁾。これ以後、遺丘の位置を移動させながら、前3千年紀第2四半期の金石併用期のVII期まで継続する(図2-1)。VII期の後、断絶を挟んで前2千年紀中頃のVIII期も設定されているが、IA期からVII期までの約5000年におよぶ生活跡の内、埋葬人骨・墓域が最初期のIA・B期、III期およびVII期から発見されている。

1. IA期

MR3 遺丘から二条オオムギ・六条オオムギ・一粒コムギ・二粒コムギとパンコムギ、さらにこれらの作物を刈り取るための鎌石刃や製粉のための磨石が出土するこの時期、すでに家屋は大小さまざまなサイズの日乾燥瓦で5×4 m位の矩形に作られる。こうした定住農耕の集落は、その東部をボーラン川に流されてしまっているが、0.3ha以上の円形であろうと考えられている。ここからは遺存する遺丘の2地点から複数の人骨と人骨を伴う墓壙が発見されている。

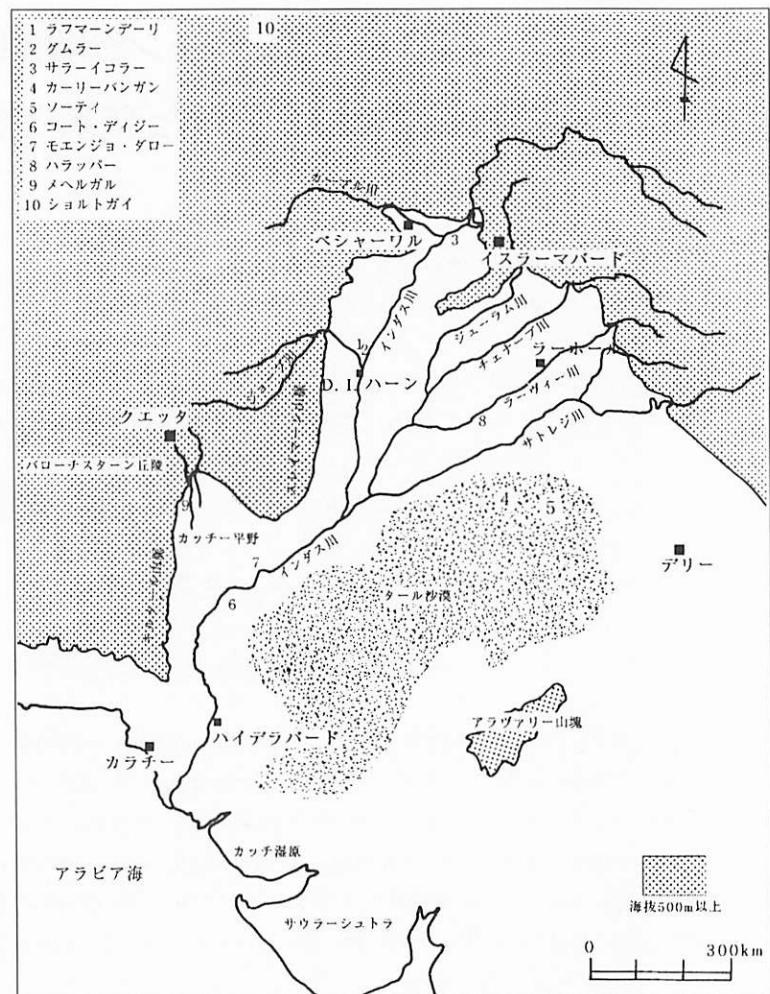


図1 インダス流域遺跡位置図

北東端に設定されたトレーニング壁面に3体の遺骸が発見された (Jarrige et al. 1995)。発見された遺骸の内1体は上層の基壇状建物に押しつぶされているものの、3体ともに比較的良好に遺存し、多数の装身具を身に着けて北面東頭位側臥伸展(図3-4)の姿勢で埋葬されたことを確認できる。装身具は、ウミギク科 (Spondilis exilis) とエゾバイ科の貝 (Engina Mendicario) 製ビーズベルト1点、ツノガイ科の貝 (dentalium) と凍石製ビーズで作られた腕輪1点、凍石製ビーズの腕輪1点、凍石・ツノガイ科の貝・トルコ石を組み合わせたビーズの首飾り1点、凍石製とツノガイ科の貝製ビーズの足輪2点、フリンスト製石刃1点、リュウテン科の貝 (Turbinella pyrum) 製バングル(足・腕輪)1点。この他に方鉛鉱の塊1点が副葬されていた。バングルを除く装身具と遺骸には赤色酸化土が塗られていた(図5-1)。

次に、遺丘南東隅の平面調査では、装身具や副葬品に量的差違が認められる土壙墓が住居に隣り合い、また住居遺構の下層から都合9基発見されている(図3-1~3) (Léchevallier and Quivron 1985)。以下にその概要を記す。

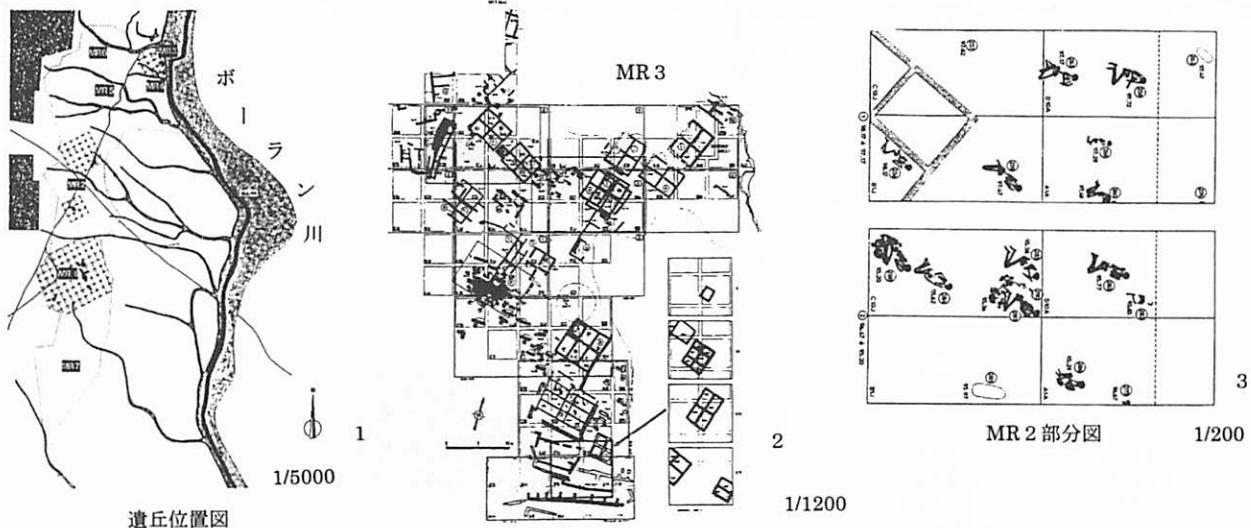


図2 遺丘と遺構図 (Jarrige et al. 1995より)

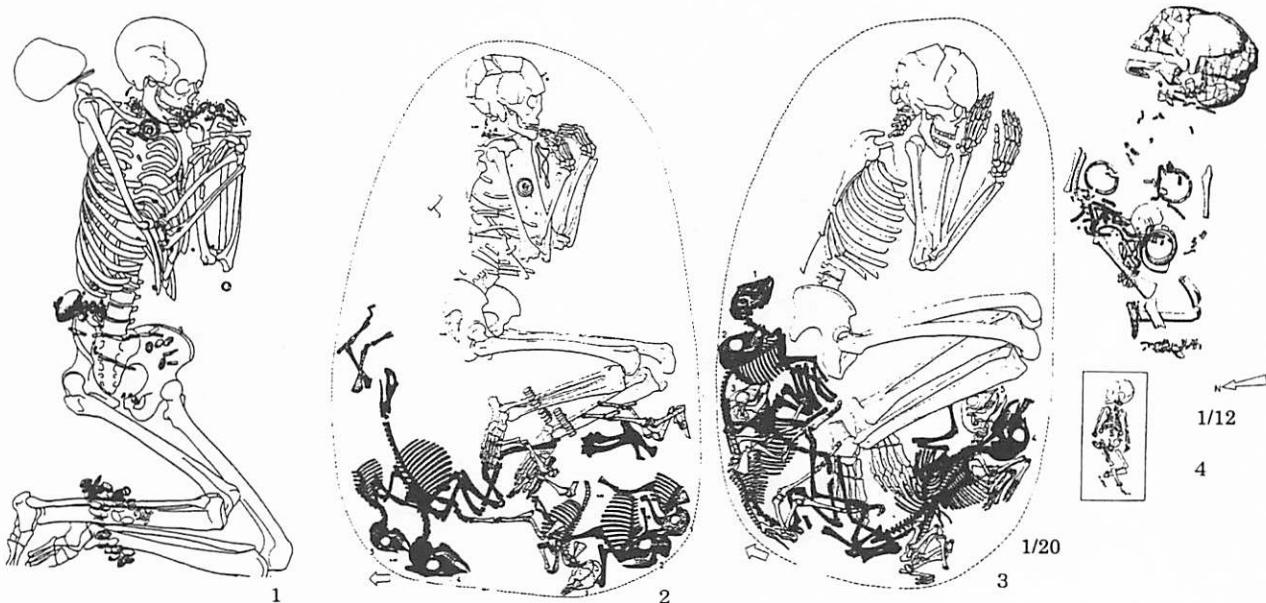


図3 IA期埋葬人骨 (Jarrige et al. 1995より)

墓288（図3-3）は、南面東頭位側臥屈葬の成人。メヘルガルの初期の墓にしばしば見られる赤色酸化土で墓壙内が覆われ、足下に家畜化された5頭の月齢3～6のヤギが隨葬される。

墓287（図3-4）も、南面東頭位側臥屈葬の成人。やはり赤色酸化土で墓壙が覆われる足下に家畜化された五頭の月齢3～6のヤギ（Lechevallier and Quibron 1985；Meadow 1982）が隨葬される他に、装身具を身に着けている。貝製（種不明）と方解石製ビーズの首飾り、方解石製ビーズの足輪、トルコ石製ビーズの鉢巻き、それにラピス・ラズリ製管玉が頸の辺りから発見されている。これら2基の墓に隨葬された家畜は、死者の社会的地位もしくは生業（牧羊者、家畜の所有者など）を示しているものであるの

か、現在のところ明確ではない。

墓283（図3-1）は、ツノガイ科の貝製首飾り、種不明貝類の真珠層と貝殻（種不明）のペンダント2点、凍石製ビーズに二枚貝（種不明）を付けたベルト、足の付近に獸骨製の足輪2点と環1点を身に着け、頭の付近には赤色酸化土と獸骨製縫い針2点が置かれているやはり南面東頭位側臥屈葬である。さらに、墓壙内からは編み籠の圧痕が残る瀝青が出土しており、これに盛られていた食物が副葬されていたことを物語る。また、食物の供物は複数の墓から出土する遊離した獸骨からも推測できる。

やはり赤色酸化土で覆われている老女の遺骸（84-12号）は、貝や石製ビーズの首飾りとベルト、真珠層ペンダントにツノガイ科のビーズを幅広に縫い付けた頭飾りを着け、

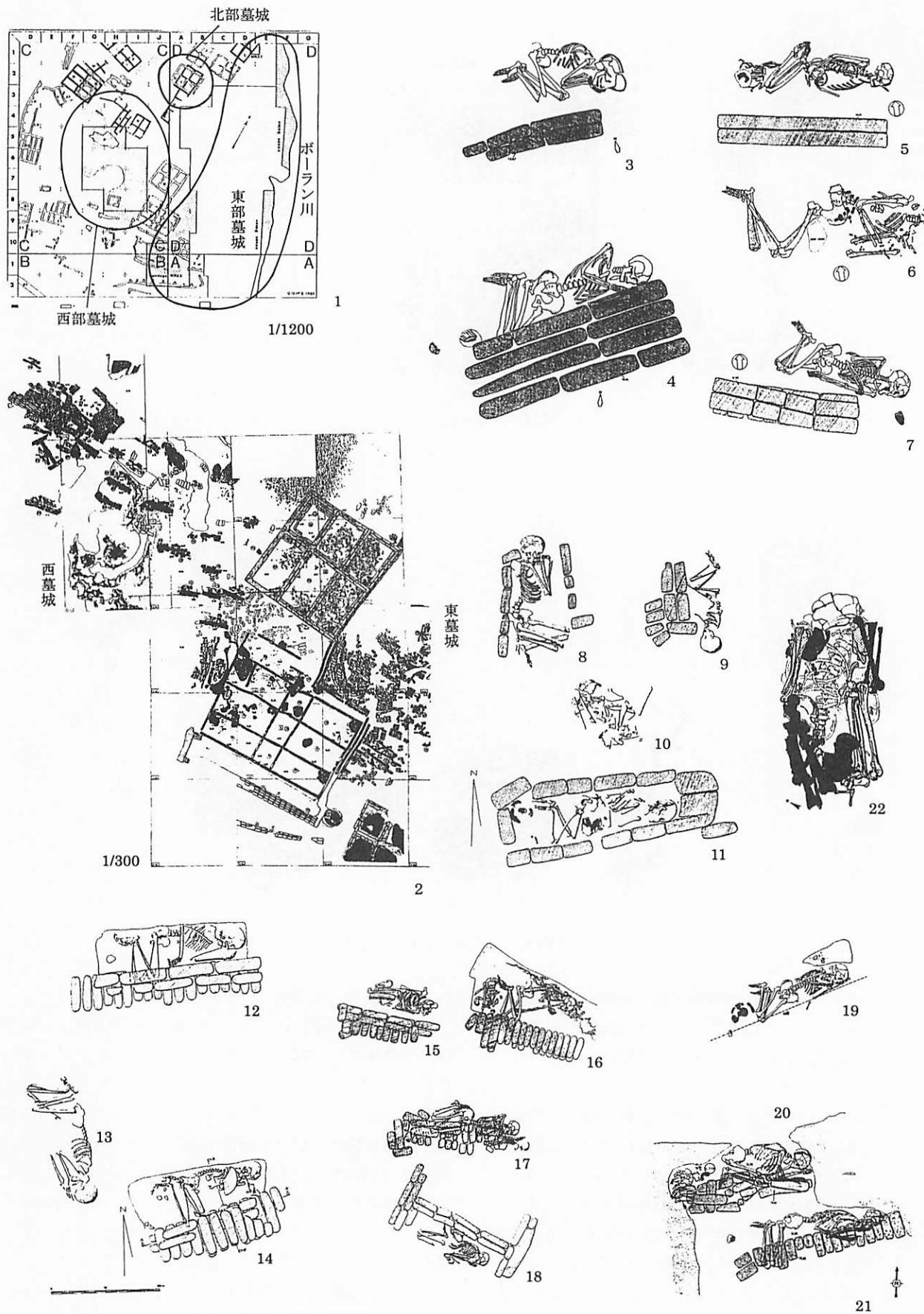


図4 IB期遺構図と埋葬人骨 (Jarrige et al. 1995より) S=1/50

頭骨付近に石製鑿が副葬されていた。他の墓壙は遺存状態が悪いものの、1頭のヤギを隨葬する墓がある。

2. I B期（図4）

MR3 遺丘上層に確認された無土器新石器文化であるこの時期には、ムギ類に加えて、ナツメの栽培も確認され、冬作物と夏作物の栽培を行っている。また、動物の家畜化が進行し、ウシ・ヒツジ・ヤギの家畜種が全獣骨の8割近くを占めるなか、家畜コブウシが最も優越し、南アジア農耕文化の特徴をこの時期より示している（Meadow 1982）。家屋は大型化し、各部屋に炉址と磨石・石皿が発見される複数の部屋から成る建物へと変わる。そして、円形の集落を囲うように稜堡付きの周壁の一部も確認されている。

この時期に発見された墓は、1 m 程掘り下げた北側に泥煉瓦壁で塞がれた墓室を作る地下式横穴墓である。発掘では、墓室閉塞壁の上段が遺骸の上に落ち込むものが確認されており、墓室内は埋め戻されていなかったことが解る。墓室閉塞煉瓦は、他の建物などには見られない煉瓦の長軸を段ごとに交差させ（1列、もしくは2列）、3段から8段が積まれる。煉瓦は大きさのまちまちな手づくねで、長さ15~50cm、幅と厚さ7~10cmである。時に焼成された煉瓦も部分的に用いられている。こうした地下式横穴墓が、周壁内の住居跡地や建物の下など、居住空間と埋葬地の区別なく発見されている。ただし、墓壙の発見される空間は、ある程度限定され、周壁内の中央部を避けるように、北部・西部・東部地域に分割できる。東部地域は未調査域を残し、またボーラン川によって流されてしまった地域もあるが、周壁内の南部から東部へと続いて広がっているとされる。よって、墓域は3地域に設けられているが、全体としては周壁内の中央を取り巻くように分布しているといえる（図4-1、2）。

（1）北部墓域

MR3 遺丘の中央北端の建物群の間に5基が発見されている（図4-3～7）。全て南面東頭位側臥屈葬で、南側に墓室閉塞泥煉瓦壁がある。屈葬姿勢における腰や膝の折り曲げ角度はそれぞれに異なり、片手や両手を腰の付近に伸ばす例もあるものの、両手を顔の前に置くものが多い。他に遺骸の遺存状況を含めた墓壙の形状、泥煉瓦壁の構築法などの詳しい報告はない。墓室を塞ぐ泥煉瓦壁は少なくとも2列の厚さにしつらえられ、図4-4では4列にもなっている。また、図4-7は2段から3段の泥煉瓦がその長軸を交互にして積まれている。

墓室内の各遺骸には装身具や副葬品が副えられており、次の3種類に分けられる（Jarrige et al. 1995: 316）。1類：トルコ石・貝・石製ビーズの装身具。2類：足下に置かれた瀝青被覆バスケットに残るヒツジの幼獣骨（墓149、図4-5）。3類：フリント製石刃、瀝青で石刃を装着した

鎌、磨製石斧などの道具類である。他の装身具や副葬品についての材質や点数についての詳しい報告はない。

（2）東部墓域

MR3 遺丘がボーラン川に削り取られた川岸のトレントにて数例と、遺丘の北東に設定したトレント内に調査から8体の埋葬骨（内3体は遺存状況悪し）、それに遺丘南東の平面調査で9基の地下式横穴墓が発見されている。

川岸のトレントでは、3地点にわたって遺骸が発見されている。遺骸は土層観察からいずれも地下式横穴墓に埋葬されたものとされ、縦坑掘り込み面の層序から下層、中層、上層に埋葬時期の分別がなされているが、調査坑壁面での確認であり、図面での報告はない。下層では、南面東頭位側臥屈葬成人墓の他に、幼児墓も含まれ、その内1例に2体の幼児が合葬されたものがある。また、墓室を塞ぐ泥煉瓦壁のない例も報告されている。上層では全ての遺骸に赤色酸化土が塗られている（Jarrige et al. 1995: 420）。

遺丘北東のトレントに発見された5基の地下式横穴墓も屈葬で、両手を顔の前に置くが、埋葬方位が一定しない。すなわち、No. 1は西面北頭位側臥、No. 2が南面東頭位側臥、No. 3は北西面北東頭位側臥、No. 4が北面東頭位側臥、No. 5は北面東頭位側臥である。副葬品には、貝製ペンダント、石製ペンダント、石・貝製ビーズ首飾り、瀝青被覆バスケットが報じられているが、詳細は不明である（Lechevallier and Quivron 1981）。

平面調査で発見された9基もやはり側臥屈葬で、頭位がそれぞれに異なる（図4-8～11）。埋葬姿勢では、やはり両手を顔の前や腰の位置に置いている。墓壙は、建物に伴う泥煉瓦敷き基壇と接するようにその東側と上層に位置し、建物と同時併存の時期からより新しい時期の期間に営まれている。こうした埋葬地選定から、居住空間と埋葬地との間に空間分離のなされていなかったことが良く見てとれる。発見された9基の内、墓63（図4-11）は、墓室閉塞壁の他に遺骸を囲むように泥煉瓦積みが配置される特異な例である。遺骸を囲む煉瓦積みは後のIII期に初めて現れる葬法であり、また煉瓦積みの上端は埋葬時に生活面上に顔を出していたとされることも含めて注意が必要である。この墓63からは、副葬品を入れたであろう瀝青被覆バスケットが出土した他に、ここに葬られた成人遺骸はトルコ石・凍石製ビーズ首飾りと石・貝製腕輪を装身具として身に着けていた（図5-2）。装身具を身に纏っているのは、成人の遺骸のみでなく、図5-3に示した2体の幼児にも遺骸を覆いつくすほど多くの石・貝製ビーズが副えられている（Lechevallier and Quivron 1981, 1985）。

（3）西部墓域

遺丘の西部に建物群と重複しながら南北に220m²の広範囲にわたって150基以上の墓壙が発見された（Samzun and

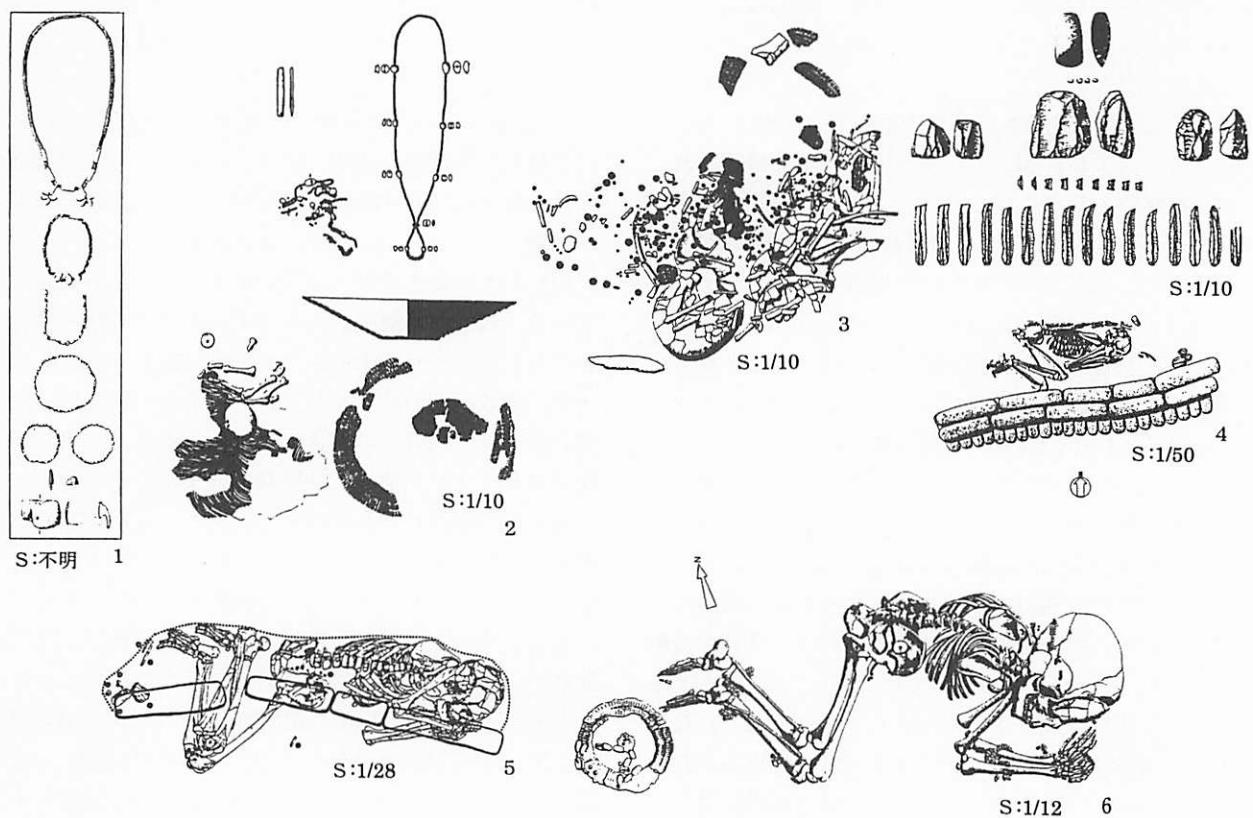


図5 人骨と副葬品 (Jarrige et al. 1955より)

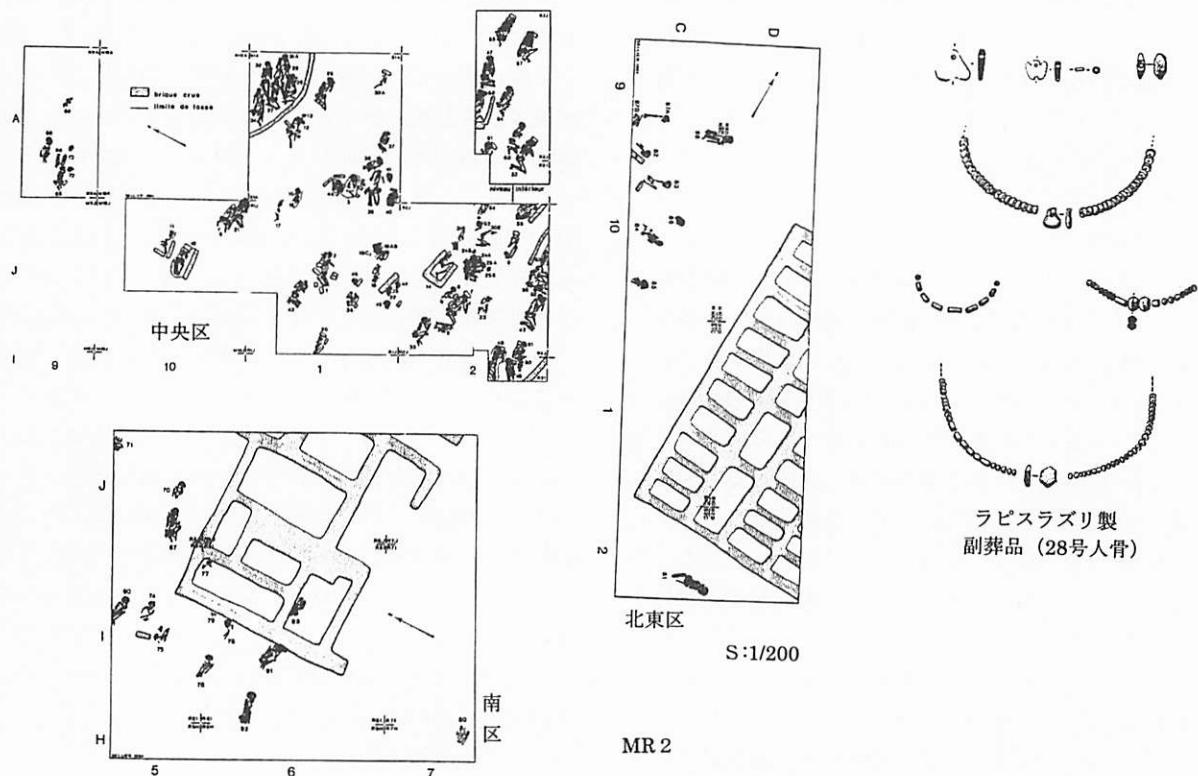


図6 III期人骨と副葬品 (Jarrige et al. 1955より)

Sellier 1985)。それらは副葬品や葬法が異なっていても、多くが南面東頭位側臥屈葬で、手を顔に当てる遺骸には赤色酸化土が塗られる。発見された遺骸には、大きく分けて次の一次葬、二次葬、集積葬の3種類がある。

一次葬：最も多く、性別と年齢を問わず標準的葬法である。

二次葬：関節が外れ、指骨などの小さな骨が失われている

2体もしくは3体が合葬されるが、遺骸の骨は混じり合わない。発見された骨の状況から、二次葬骨が追葬されされたと考えられる(洗骨葬)。また、追葬の後に側壁を積み重ねるために、一次葬の遺骸の上に煉瓦が積まれた例も報告されている。特異な例としては、成人と乳児がそれぞれに全身骨格の一部を欠損して、関節の外れた状態で埋葬されていた二次葬が2例ある。これらの成人骨には元の屈葬の状態に戻されるが、南面でなく北面している遺骸(墓166)もある。

集積葬：墓壙内の遺骸を西に寄せて、追葬の空間を作り、そこに間接の外れた部分骨が集積される(洗骨葬)。発見状況からは、いったんは埋め戻された墓を開いて、人骨を集めたことを示している(Sellier 1992)。おそらくは、墓域の確保のために行われた葬法と考えられる。

次に個々の墓壙の様相を西部墓域の中にあって、その最北端に位置する泥煉瓦基壇脇に、基壇が存続したIB期中の2文化相に加えて、基壇より遅いIB期最上層の都合3文化相にわたる墓壙の一群から窺うことにする。下層の2時期に発見された墓壙は、基壇の煉瓦積みと同じく長軸を交互に4段を積んだ閉塞壁が南側に残る墓室内に側臥屈葬で葬られている。これに対して、最終期の5基の墓壙は墓室の閉塞煉瓦が1段しか積まれず、また副葬品や装身具を全く持たない南面東頭位側臥伸展葬であるなど下層の葬法と異なる。最終文化相に発見された葬法は、後続時期でも見られる屈葬姿勢と比べても特異なものであるが、現時点ではその意味を即断しがたい。

発見された墓壙の多くは、墓室を塞ぐ煉瓦が崩れ落ちているため、性別がほとんど判別不可能とされているが、21基から出土した24体については性別とおおまかな年齢が推定されている(Lechevallier and Quivron 1981)。墓室に残された副葬品を見ると、成人男性の墓119(図4-19)に磨製石斧、石核、一塊の瀝青、トルコ石製ビーズ2点、瀝青被覆バスケットが、また性別不明の墓116も同様に磨製石斧と石核が副葬される。7才前後の小児墓121(図5-6)は、より多くの装身具と副葬品を持つ。貝製(種不明)とトルコ石製ビーズの鉢巻き、トルコ石・紅玉髓・凍石製ビーズを組み合わせた首飾り、貝殻真珠層のペンダント、方解石製菱形ビーズによる腕輪と足輪がそれぞれ2点、貝製極小白色ビーズが259個も連ねられたベルトを身に付け、足下

に方解石製樽形ビーズを納めた瀝青被覆バスケットが置かれていた。墓114(図4-6、図5-4)には、2列に並んで配置された未調整石刃16点、これらを剥ぎ取ったであろうフリント製石核3点、背付台形細石器1点、トルコ石製ビーズ4点、瀝青被覆バスケット1点が副えられている(Lechevallier and Quivron 1981)。

他に、集積骨を納めた墓壙からも貝製・トルコ石製・ラピス・ラズリ製ビーズを組み合わせた首飾り1点が出土し、また墓室内遺体の足下に配置された二次葬骨が2例見られる。その二次葬骨にフリント石核、石碗、磨製石斧の副葬品と、貝製真珠層ペンダント、トルコ石製ビーズ、石・貝製ビーズの首飾り、銅製管玉、トルコ石・凍石・貝製ビーズ、ラピス・ラズリ製ビーズの装身具が副えられていた例もある(Jarrige et al. 1995:246)。

3. III期

集落が12ha程にまで拡大して、貯蔵などに用いられる土器が現れたII期の後、前5千年紀後半のIII期に一般住居より大きく(9×9m)細かに仕切られた倉庫ではないかとされる建物が現れて、食料を含めた物資の集積が共同体を主導として行われていたことが、倉庫の遺跡内配置から推定できる(宗墓 1998b)。こうした土器新石器文化期の遺骸がMR2遺丘から発見されている。遺骸は、遺丘に設定した合計144m²の3つの調査区である中央区・南区・北東区から125体発見された。調査区全域で地山までの掘り下げを行っておらず、また墓壙の掘り込み層位をそれぞれに判別できないとされるが、およそ800m²の広がりを持つと予想される墓域に埋葬された遺骸は、1360体の数に上ると考えられている⁵⁾。建物遺構と埋葬遺骸との前後関係は報告書に明記されていないが、この時期においても居住空間と墓域との明確な分離は行われなかつたと思われる。

発見された遺骸の遺存状況は良くないが、南東面東頭位屈葬の1体の幼児を除いて、全て南面東頭位側臥屈葬で、多くは両手を顔の前に置く。全体の25%位の頭蓋の下に泥煉瓦枕が置かれる。発見された墓壙と葬法をまとめると次のようになる。

1：全体の3分の2の遺骸に墓壙や墓室閉塞壁を確認できないが、これは墓壙の重複によるものであろうと考えられている。遺骸の周囲に泥煉瓦壁が巡るものや、南側にIB期以来の墓室閉塞壁が残される例もあることから、多くは墓室内に埋葬された地下式横穴墓と考えられる。

2：二次葬の場合は必ず追葬として行われる⁶⁾。

3：6体が埋葬された円形と思われる泥煉瓦囲いの集積墓も見られる。集積された遺骸は、解剖学上、間接が遊離していないことから、同時に死亡したか、開口した煉瓦囲い墓壙に継続的に安置されたかのどちらかである。

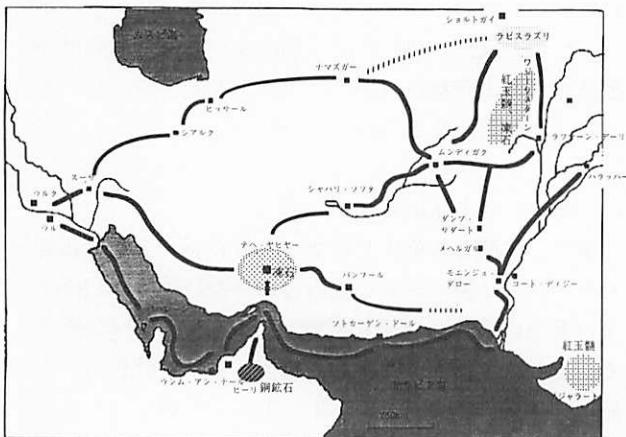


図7 前4～3千年紀交易路想定図（小西 1977を改変）

4：副葬品は少なめであるが、装身具はほとんどの遺骸が身に着けている。

また、副葬品もしくは装身具の発見された遺骸は次の類型に分けられる。

- 1：頭蓋と右肩の間に土器が置かれる女性（番号91）と、背に土器が置かれる男性の2例以外には、土器の副葬がない。

2：銅／青銅製の腐食の激しい円形区画文印章が女性遺骸（番号33）の頭蓋付近に1点のみ発見された。

3：副葬されたものの中で最も多いのが装身具である。遺骸37には、加熱処理された黒色凍石の管玉（直径2mm、長さ1mm）300点以上で作られた3連の首飾りと、より長い凍石製管玉の腕輪と頭飾りが、いずれもペンダントを付属させて身に着けている。また遺骸17には、ラピス・ラズリや紅玉髓、トルコ石、瑪瑙などの貴石ビーズの他に鹹水産貝製（種不明）ビーズも出土している。この他に、多くの遺骸が首飾りやペンダントを1点は身に着けているが、中にはさらに1～2点の腕輪が追加されている（女性では4体、男性では1体、幼児では1体）。

これらの装身具は量に多寡はあるものの、同質的である。ただし、幼児に少ないことが指摘されている(Samzun and Sellier 1985; Sellier 1995)。III期出土の99体の遺骸を分析したサムツウンとセリエによると、成人と小・幼児の比率は73.7% : 26.3%、成人男女比率の判明しているのは男子38%、女子28%。また小・幼児の内で最多が5~9才の9体の35%である。さらに、装身具の材質を成人男女と、小・幼児で分類すると成人男子に貴石類(ラピス・ラズリ、トルコ石、紅玉髓)と凍石を持つ例が多く、36%と39%となる。成人女子と小・幼児ではそれぞれ20%と20%、11.5%

と15.6%となる。他方、装身具の有無の内訳では成人女子(60%)、小・幼児(73%)がそれらを持たず、その比率の高いことが示される(Samzun and Sellier 1985)。装身具が、成人男性に帰属する社会的役割を暗示している。

葬法・副葬品と社会階層

メヘルガル遺跡における葬法は、IA期に少数ながら発見された伸展葬がIB期最上層にも5例を認められたが、IA期以来、南面東頭位の屈葬を基本として、IB期に北側の墓室を煉瓦壁で塞ぐ地下式横穴墓に南面東頭位側臥屈葬姿勢で葬ることが確立して、III期まで引き継がれる。その一方、泥煉瓦壁が遺骸の周囲をめぐる類例がIB期に初現して、III期にその数を増加させていた。III期の後、金石併用期のIV期からVI期に帰属する墓域は発見されていないが、ハラッパー文化と一時期併存するVII期とインダス文明期、さらにはより時期の降ったメヘルガルVIII期に箱形の泥煉瓦壁墓壙に東頭位側臥屈葬で葬られる葬法が一般化する。IB期に現れ、III期に増加した遺骸を巡る泥煉瓦壁は現在までのところVII期に確認できる箱形の泥煉瓦壁墓壙の先駆けと考えられる(Samzun and Sellier 1985; Sellier 1992)。顔の向きを別にすれば、東頭位側臥屈葬の埋葬は、ハラッパー文化においても用いられる葬法であり、東頭位側臥屈葬姿勢は無土器新石器文化からハラッパー文化にまで引き継がれる葬法であったことを確認することができる(Halim 1987)。

他方、副葬品を見るならば、メヘルガルVII期での装身具の多さに比べて⁷⁾、地下式横穴墓の用いられるI期からIII期までの副葬品の概して少量であることを確認できる。遺骸が身に付ける装身具には、呪術的要素を見ることもできるが、その装身具の素材が無土器新石器のIA期より一貫してラピス・ラズリや鹹水産貝類などの交易によって入手されたものが多いことが注意され、装身具を副えられた遺骸が前5千年紀後半のIII期には男性に高い比率で現れることをみた。しかし、I期における小児遺骸が身に着ける装身具は、再生を願いつつ小児葬送時の護符的性格を持っていたとしても、あまりにも豊富であることに注目できる。また、新石器文化段階埋葬骨に数例見られた成人と小児の合葬墓は、おそらくは親子関係の遺骸が葬られたものと推定できる。メヘルガルIII期の円形煉瓦積み集積墓とは、千年以上の隔たりがあるものの、前3千年紀初頭のシャハリ・ソフタの墓域から、泥煉瓦積み壁を持つ円形墓壙に一次葬の13体以上の遺骸と家犬までもが埋葬された集積墓が発見されている (Pardini and Pardini 1997)。この集積墓出土遺骸を分析した結果、明らかに解剖学的類似性を持つ男性と女性の存在などから2つのグループ間での婚姻関係を持つ家族、もしくは親族が追葬された家族墓であると推

定されている。メヘルガルIII期の集積墓が同様の家族墓であるとすれば、他の地下式横穴墓に葬られた人々とは一定の社会的差違を有する家族の墓ではないかとの想定もあながち的外れではないようと思われる。しかしながら、副葬品や装身具において、顕著な差違をこの家族墓と他の地下式横穴墓群との間に見いだせない。この意味は何であろうか。

新石器文化段階での遠隔地間交換は、直接的交換よりも短距離の間接的交換の連続の積み重ねの可能性が大であろう。こうした中で、彼らは鹹水産貝類や貴石類を入手したのであり、その交換では栽培穀物や土器などの日常品を用いた顔の見える交換であった可能性が高い（互酬連鎖交換）。この場合、特定の家族や親族が交換を一手に担うことはなかったであろうと考えられる。こうしたことが、新石器文化段階のメヘルガル遺跡集落内の社会において、埋葬時の装身具に家族間での差違を生み出させなかつたと考えられる。ただし、遠隔地間交易によって得られたラピス・ラズリ製装身具が成人男性に多く副えられるのは、交易にかかる社会的性分担を示すものであるのか、また威信財的意味を持つものであったのかは、より詳細な副葬品の報告を待たねばならない。

おわりに

新石器文化以降の西アジアから南アジア世界にあって、貴石製品は広範囲な地域に及ぶ交易活動を窺うことのできるものとして従来より注目されてきた⁸⁾。貴石類の産出地の同定と製品加工地、および完成品出土地点の集成から、往時の交易路もある程度、想定・復元されている（図7）。この交易ルートは、南アジアにおいては初期農耕文化期からインダス文明期におよぶ、前4千年紀から前3千年紀末頃までを想定している（小西 1977）。しかし、前7千年紀にまで遡るメヘルガル遺跡の墓壙内から出土した貴石、とくにラピス・ラズリ製ビーズは、貴石交易が南アジアにおいては、より遡るものであったことを指し示している。とくに、インダス文明興盛直前のバローチスター農耕文化に包摂されるラフマーン・デーリ（Rahman Dehri）遺跡で発見されたラピス・ラズリの攻玉未成品や製品の豊富さは（宗臺

表1 ラフマーン・デーリ遺跡出土ビーズ（宗臺 1998）

層位	ペースト	ラピスラズリ	紅玉髓	瑪瑙	碧玉	蛇文岩	凍石	石英	不明	チャート	テラコッタ	貝	金	銀／青銅	合計	%
1			1					2							3	0.25
2															0	0.00
3															0	0.00
4	10	6	2												18	1.50
5	4	8		1		1									14	1.17
6	16	6	2	1		1	1	3	2		1				33	2.76
7	66	13	10	10	1	3	8	12	5	1	4	6	1	170	14.20	
	(2)									(1)		(1)		(4)		
8	133	114	14	13	3	4	4	16	7	2	18	6	2	330	28.07	
	(1)	(11)	(11)					(11)				(1)				
9	84	47	9	6	1	3	5	5	3		10	7	1	181	15.12	
10	69	19	5	7	1		3	14	4	1	3	4		2	132	11.03
	(1)								(2)	(1)	(1)					
11		5	2				2				1	1	3		14	1.17
											(1)					
12	24	9	3	1		1	1	1			1				41	3.43
13	3	1													5	0.42
14	39	11		2			2	1	1	2		2	1		61	5.10
				(1)						(2)		(1)				
15	6	2					1	2		1	2				14	1.17
											(1)					
16	15	7		4		(1)		1	3	2					33	2.76
17	42	7					1	3	1		2	2			58	4.85
18	12	8	5	2		(1)			2			2		31	2.59	
		(1)														
19	9	8	2	3				2	1						25	2.09
20	18	5	3				1		1						28	2.34
合計	550	306	58	50	6	13	30	66	27	9	42	33	5	2	1197	100.00
%	45.95	25.56	4.85	4.18	0.50	1.09	2.51	5.51	2.26	0.75	3.51	2.76	0.42	0.17	100.00	

() 内の数は出土品中の母岩ないし棒状品、金は板状品の数を示す

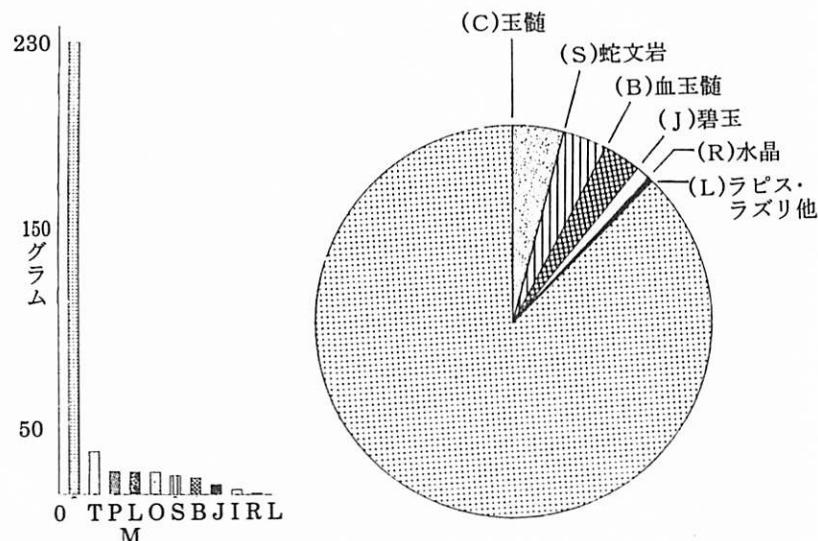


図8 モエンジョ・ダロー表面採集ビーズ出土量グラフ (Viclae 1987)

1998a)、インダス文明の主要都市遺跡であるモエンジョ・ダローの工芸活動地域でのラピス・ラズリの出土量をはるかに凌駕する（図8）。おそらく文明期のハラッパー文化においては、遠隔地間交換が文明社会にとって重要な経済的位置を占める装置であり⁹⁾、交易=交換によって得られたラピス・ラズリが一般住民の手元には残らなかつたと思われる¹⁰⁾。

交易に関わることと、関わらないことが、文明以前の新石器文化段階から初期農耕文化期においても、集団内部に階層化を引き起こす可能性を持っていたであろうことは想像に難くないが、メヘルガルに発見された墓群内部に明瞭な階層化を見いだすことのできない状況は、西アジアがラ

ピス・ラズリ交易圏に参入した前4千年紀初頭以降の貴石交易規模と比較してより小規模な交易圏であったことに加えて、集団と交易との関わり方に起因するものと考えられる。

現在、交換の概念とそれが社会に及ぼす影響の理論化については、民族学事例の再検討が議論的となっているが、西アジアとの海上ルートと陸上ルート交易の双方に関わった後世のインダス文明期における交易と社会の関わり方、そして交易規模がそれ以前と異なっていたためにインダス文明とバローチスタン丘陵における農耕文化との社会的差違を生み出したものと考えられる。ただし、今回は明らかにできなかったバローチスタン丘陵域の新石器文化から初期農耕文化期における社会階層化の有無とその構成を見いだす努力によって、より具体的に知ることができるようになると思われる。

G. シェーファー (Shaffer) はインダス文明圏における域内交易の重要性に着目して、西方文明のように交易を軸として、世襲的・経済エリートの出現によって生まれた社会組織とは異なる文明社会を築いた南アジア古代文明社会の解明には、西アジア研究からの借り物でないモデル作りが必要であると、主張している (Shaffer 1982)。しかし、それには拙文で垣間見た新石器文化期に互酬連鎖交換によってパミール高原からアラビア海に至る広汎な地域に及ぶ交易が行われていたことを前提とするべきであり、またその中にはジェイトウン (Jeitun) の新石器文化が勃興した南トルクメニアも介在していたと思われ、域外との関係性も忘れてはならない。さらに留意すべきは、これまでのところ南アジアにおける最古の新石器文化を形成したメヘルガル遺跡が丘陵地から降り立った平野の外縁に位置し、年間降水量130mm 前後の内、その多くをモンスーンによる夏雨でありながら、農耕は丘陵地の雪解け水を利用するムギ類栽培から始まり、後続して夏作物が現れることである。南アジアの中でもインダス流域とその周囲の丘陵縁辺地域が早くから自然地理環境に適応できた理由がどこに在ったのか探る努力が必要と思われる点を指摘してまとめにかえたい。

註

- 1) インダス文明期諸遺跡から出土する銅器／青銅器製武器は、鎧がなく、また概して薄いために実用品ではなかったのではないかと考えられている (辛島他 1980: 71)。また、争いによって殺されたと考えられる遺骸や埋葬人骨でも鎧などが刺さっている例は発見されていない。
- 2) インダス文明圏においては主にビーズやペンダントに加工されたラピス・ラズリは、貴石交易にあってビーズのみでなく装飾部材として前4000年頃以降の西アジアやエジプトから希求された石材でもあった (高宮 2001)。

3) メヘルガル遺跡発掘調査から採取された放射性炭素14測定試料は、 β 線計数法により、全て半減期を5568年とするワシントン大学第四紀同位体研究所補正プログラム1987によって補正された年代が示されている。報じられているメヘルガル遺跡 I A・B 期の測定値は以下の通りである (Ehrich 1992: 436; Jarrige et al. 1995: 555)。

時期	資料番号	補正年代	時期	資料番号	補正年代	時期	資料番号	補正年代
I A	Beta-1721	9385±120	I A	Beta-1407	7115±290	I A	Beta-1408	6925±80
I A	Ly-1947	5830±190	I A	Ly-1948	5720±730	I A	Ly-1949	5530±180
I B	Ly-1946	33000±3000	I B	Beta-1719	13340±125	I B	Ly-1950	8440±250
I B	Lv-994	6290±70	I B	Lv-993	6110±90	I B	Lv-908	6090±70
I B	Lv-907	6020±80	I B	Lv-906	5950±65	I B	Lv-909	5940±55

I A 期の放射性炭素測定年代値には、ばらつきが見られ、最古で前9000年、最新のもので前6千年紀中頃が示されているが、I A 期に続く I B 期の測定年代値が、前7千年紀末から前6千年紀初頭で全ての測定値がほぼそろっている。この I B 期の年代を勘案して、I A 期の始まりは前7000年頃とされる。ただし、I A 期当初より、動物の家畜化がどれ程まで進行していたのかは、I A 期の文化相が明示されていないままに、前7000年と家畜化が同時に論じられる傾向がある。なお、メヘルガル遺跡では、家畜化の開始当初からウシが家畜化されており、南アジア新石器農耕の特色となっている (宗塩 1997)。以下本文中に示す年代は、全て上記の補正值である。

また、南アジア考古学全般における ^{14}C 測定については、1980年代頃より補正值が示されるようになり、それ以前までの測定結果などとの検討が行われて、測定値の集成が刊行されている。しかしながら、インダス文明期にかかる試料がそのほとんどである (Lal 1994)。加速器を用いた質量分析法 AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は、まだほとんど用いられていない。

- 4) 内訳は成人19、幼児もしくは小児3、未確認2であった。
- 5) 調査区の一部で全層を発掘した結果、III期堆積土中から発見された遺骸は 1 m² に 1.7 体の割合であったという。これに予想される墓域の広さをかけたものが表記の数である。
- 6) 遺骸番号 65/72、12/13、15/16、7/9、87A/87B、50/51。
- 7) MR1 遺丘の調査にて VII 期に帰属する 21 基の泥煉瓦箱形墓室乳幼児墓が発見されている。墓室の規模は、60×45cm、深さ 15~25 cm を測る。13基の墓から南東-北西軸の人骨が発見されて、7 例が北面、6 例が西面する。頭蓋が 2 個出土した 1 例墓からは、頭付近から白玉 2 点が出土している。同様のビーズは他の墓からも出土している。箱型墓室は成人の埋葬にも用いられ、110×80cm の墓室内に北面東頭位側臥屈葬人骨の手の下に土器皿が 2 点、紅玉髓とラピス・ラズリを交互に配したビーズネックレスが頸の辺りに、また白色極小ビーズのプレスレッドが手首から発見されている。同様の箱型墓室墓はナール (Nal) 遺跡から 1 例発見されている (Hargreaves 1929)。

MR1 遺丘の南では、地元民が青銅／銅器を発見した場所にトレーナーを入れると、50×25cm または 25×25cm の焼成煉瓦で囲まれた墓壙が発見されている。前2千年紀に下る VII 期に帰属し、南西頭位の屈葬の成人の足の上に南西頭位北面側臥伸展葬の身長 115cm ほどの小児の遺骸も発見されている。成人遺骸は右手を顔に、左手を背中に回している (Jarrige et al. 1995)。

- 8) 貴石を産出しない地域に立地するメヘルガル遺跡の副葬品として出土している貴石製品は、貴石交易または製品としてのビーズ交易に関わるなかで入手されたものであると考えられる。他方、遺跡のあるバローチスタン丘陵に産出する凍石を用いた攻玉活動は活発であった。メヘルガル遺跡では、前5千年紀前半の MR4 遺丘に凍石製臼玉製作工房が発見され、その製作過程の復元と資料の計測が行われている。計測データからは熟練工と見習

- いが共に働いていたとされる (Vanzetti and Vidale 1994)。これに対して、ラピス・ラズリの攻玉工房は発見されていないために、副葬品のラピス・ラズリビーズは交易によって完成品を入手したものと考えられる。メヘルガル遺跡へのラピス・ラズリビーズの搬出元は、ムンディガクとラフマーン・デーリが考えられる (Casanova 1994; de Saizieu and Casanova 1993; Durrani et al. 1994-95)。
- 9) インダス文明がその文化領域を拡大する理由が交易路の確保にあったことを、インダス文明遺跡とバローチスター遺跡の同一地域内での交代から、すでに指摘している (宗臺 1999)。同様にフォクトは陸上交易に関して、インダス文明周縁の地域によって組織された交易ルートを通って、まず品物はインダス流域に運ばれた後に領域内へと再分配される経済構造を指摘し、その時点におけるバローチスターの物流の玄関としての重要性は失われたと指摘している (Franke-Vogt 1993)。
- 10) そうした遠隔地交易によって入手される石材の不足分を補うために、メヘルガルII期に発見された凍石製ビーズ製作址に確認できるファイアンスによる着色によってトルコ石などを真似ている (Vanzetti and Vidale 1994)。加えて、インダス文明は前2500年前後にハラッパー文化遺跡ショルトガイ (Shortughai) をラピス・ラズリ産出地に隣接した地に設けているが、本文中に述べたようにインダス流域のインダス文明都市遺跡でさえ、バローチスターの農耕文化遺跡よりビーズやその原材料は少ない (Francfort 1983, 1984)。なお、凍石製ビーズにファイアンス釉を施すのは、さらに西方のエジプト・バダリ文化 (5500-4000B.C.) の凍石ビーズに見られる (Denys 1997)。

参考文献

- Allchin, F. R. and B. Allchin (eds.) 1997 *South Asian Archaeology 1995: Proceedings of the 13th Conference of the European Association of South Asian Archaeologists, Cambridge, 5-9 July, 1995*. Science Publishers, Inc. for the Ancient India and Iran Trust.
- Casanova, M. 1994 Lapis Lazuli Beads in Susa and Central Asia: A Preliminary Study. In Parpola and Koskikallio 1994, 137-145 (Vol. I).
- Chakrabarti, D.K. 1990 *The External Trade of the Indus Civilization*. New Delhi, Munshiram Manoharlal Publishers.
- de Saizieu, B. and M. Casanova 1993 Semi-Precious Stone Working at Mundigak: Carnelian and Lapis Lazuli. In A. J. Gail and G. J. R. Mevissen (eds.), *South Asian Archaeology 1991: Proceedings of the Eleventh International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe, held in Berlin 1-5 July 1991*, 17-30. Stuttgart, Franz Steiner Verlag.
- de Saizieu, B. and A. Bouquillon 1997 Evolution of Glazed Materials from the Chalcolithic to the Indus Period based on the Data of Mehrgarh and Nausharo. In Allchin and Allchin 1997, 63-76.
- Durrani, F.A., I. Ali and G. Erdosy 1994-95 The Beads. *Ancient Pakistan* 10: 15-81.
- Ehrich, R.W. (ed.) 1992 *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd edition. Chicago, University of Chicago Press.
- Franke-Vogt, U. 1993 The Hrappans and the West: Some Reflections on Meluhha's Relations to Magan, Dilmun and Mesopotamia. 『金沢大学考古学紀要』20号 72-101頁 金沢大学文学部考古学研究室。
- Francfort, H.P. 1983 The Relationship between Urban Lowlands and Mountaineous Areas in Protohistory as seen from Shortughai. *Journal of Central Asia* 8/2: 125-131.
- Francfort, H. P. 1984 The Early Periods of Shortughai (Harappan) and the Western Bactrian Culture of Dashly. In B. Allchin (ed.), *South Asian Archaeology 1981: Proceedings of the Sixth International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe, held in Cambridge University 5-10 July 1981*, 170-175. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hargreaves, H. 1929 *Excavations in Baluchistan, 1925. Memoirs of the Archaeological Survey of India, New Delhi No. 35. rep. 1981*. New Delhi, COSMO Publications.
- Halim, M.A. 1987 Burial Practices at Harappa. In M. Janse, M. Mulloy and G. Urban (eds.), *Forgotten Cities on the Indus Early Civilisation in Pakistan from the 8th to the 2nd Millennium BC*, 198-206. Maiz, rerlag Philipp von Zabern.
- Jarrige, J.-F. et al. (eds.) 1995 *MEHRGARH, Field Reports 1974-1985: From Neolithic Times to the Indus Civilization*. Karachi, Goverment of Pakistan.
- Jarrige, J.-F. and M. U. Hassan 1987 Funerary Complexes in Baluchistan at the End of the Third Millennium in the Light of Recent Discoveries at Mehrgarh and Quetta. In K. Frifelt and P. Sorensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985: Papers from the Eighth International Conference of [the Association of] South Asian Archaeologists in Western Europe, held at Moesgaard Museum, Denmark, 1-5 July 1985*, 150-166.
- Kenoyer, J.M. 1997 Trade and Technology of the Indus Valley: New Insights from Harappa, Pakistan. *World Archaeology* 29/2: 262-280.
- Lal, B.B. 1994 The chronological Horizon of the Mature Indus Civilization. In J. M. Kenoyer (ed.), *From Sumer to Meluhha: Contributions to the Archaeology of South and West Asia in Memory of George F. Dales, Jr.*, 15-25. Wisconsin, University of Wisconsin.
- Laneli, N. and M. Vidale 1998 An Anatomy for the Truncated-Conical Bowls of Shar-i Sokhta. *East and West* 48/3-4: 225-264.
- Lechevallier, M. and G. Quivron 1981 The Neolithic in Baluchistan: New Evidences from Mehrgarh. In H. Härtel (ed.), *South Asian Archaeology 1979: Papers from the Fifth International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe, held in Berlin*, 71-92. Berlin, Reimer.
- Lechevallier, M. and G. Quivron 1985 Results of the Recent Excavations at the Neolithic Site of Mehrgarh, Pakistan. In Schotsmans and Taddei 1985, 69-90.
- Meadow, R.H. 1982 From Hunting to Herding in Prehistoric Baluchistan. In S. Pastner and L. Flam (eds.), *Anthropology in Pakistan: Recent Socio-Cultural and Archaeological Perspectives*, 145-153. Karachi, Indus Publications.
- Pardini, E. and E. C. L. Pardini 1997 Anthropological Observation on the People Buried in a Multiple Grave in the Necropolis of Shahri Sokhta (Sistan, Iran). In Allchin and Allchin 1997, 891-897.
- Parpola, A. and P. Koskikallio 1994 *South Asian Archaeology 1993: Proceedings of the Twelfth International Conference of the European Association of South Asian Archaeologists held in Helsinki University 5-9 July 1993*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

- Samzun, A. and P. Sellier 1985 First Anthropological and Cultural Evidences for the Funerary Practices of Chalcolithic Population of Mehrgarh, Pakistan. In Schotsmans and Taddei 1985, 91–119.
- Schotsmans, J. and M. Taddei (eds.) 1985 *South Asian Archaeology 1983 : Papers from the Seventh International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe held in Brussels*. Naples, Istituto Universitario Orientale.
- Sellier, P. 1992 The Contribution of Paleoanthropology to the Interpretation of Functional Funerary Structure: The Graves from Neolithic Mehrgarh Period IB. In C. Jarrige (ed.), *South Asian Archaeology 1989 : Papers from the Tenth International Conference of South Asian Archaeologists in Western Europe, Musée national des arts asiatiques-Guimet, Paris, France, 3–7 July 1989*, 253–266. Monographs in World Archaeology 14. Madison, Prehistory Press.
- Sellier, P. 1995 Paléodemographie et Archéologie Funéraire: Les Cimetières de Mehrgarh, Pakistan. *Paléorient* 21/2: 123–143.
- Shaffer, J.G. 1982 Harappan Commerce: An Alternative Perspective. In S. Pastner and L. Flam (eds.), *Anthropology in Pakistan : Recent Socio-Cultural and Archaeological Perspectives*, 166–210. Karachi, Indus Publications.
- Sharma, A.K. 1999 *The Departed Harappans of Kalibangan*. New Delhi, Sundeep Prakashan.
- Sharma, A.K. 1982 The Harappan Cemetery at Kalibangan. In G.L. Possehl (ed.), *Harappan Civilization : A Contemporary Perspective*, 297–299. New Delhi, Oxford & IBH Publishing Co.
- Tusa, S. 1990 Ancient Ploughing in Northern Pakistan. In M. Taddei (ed.), *South Asian Archaeology 1987 : Proceedings of the Ninth International Conference of the Association of South Asian Archaeologists in Western Europe, held in the Fondazione Giorgio Cini, Island of San Giorgio Maggiore, Venice*, 349–376. Rome, Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Vidale, M. 1987 Some Aspects of Lapidary Craft at Moenjodaro in the Light of the Surface Record of the Moneer South East Area. In M. Jansen and G. Urban (eds.), *Interim Reports Vol. 2 : Reports on Field Work Carried out at Mohenjo-Daro Pakistan 1983–84*, 113–149. Roma, ISMEO.
- Vanzetti, A. and M. Vidale 1994 Formation Processes of Beads: Defining Different Levels of Craft Skill among the Early Beadmakers of Mehrgarh. In Parpola and Koskikallio 1994, 763–776 (Vol. II).
- Wheeler, R.E.M. 1968 *The Indus Civilization*, 3rd. ed. Cambridge, Cambridge University Press.
- 辛島 昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一 1980 「インダス文明—インド文化の源流をなすもの」 NHK 出版。
- 小西正捷 1977 「バハラーン考古紀行(2)・(3)」「Circum-Pacific」9 号 2–26 頁 環太平洋学会。
- 近藤英夫 2000 「インダス文明とは何か」「四大文明 インダス」 101–120 頁 NHK 出版。
- 宗臺秀明 1997 「パローチスター農耕文化とその展開」「物質文化」62 号 1–21 頁 物質文化研究会。
- 宗臺秀明 1998 a 「先史パーキスターの玉作工程と技法—ラフマーンデーリ遺跡出土のテラコッタとペースト製ビーズ玉を中心として—」「網干善教先生古稀記念考古学論集」1459–1479 頁。
- 宗臺秀明 1998 b 「先史集落の形態」「インド考古研究」19 号 85–93 頁 インド考古研究会。
- 宗臺秀明 1999 「インダス地域の編年と課題」「古代オリエントにおける都市形成とその展開 平成 8~10 年度科学的研究費補助金成果報告書」39–46 頁 東海大学考古学研究室。
- 高宮いづみ 2001 「前 4 千年紀ナイル河下流域におけるラピスラズリ交易について」「西アジア考古学」2 号 21–37 頁 日本西アジア考古学会。

宗臺秀明
鶴見大学文学部
Hideaki SHUDAI
Tsurumi University